

「脳科学と倫理」プログラム・邦訳文献講読
「ガザニガ『脳の中の倫理』を読む」第1回

今学期は、マイケル・S・ガザニガ『脳の中の倫理』（訳・梶山あゆみ）を読むことになる。著者は、ダートマス大学教授として分離脳の研究をはじめ脳科学の第一線で働くとともに、米国大統領生命倫理評議会のメンバーを務めている。

脳・神経倫理学は、21世紀と共に始まったばかりの新しい分野である。その第一の課題は、脳の機能・発生に関する知見の蓄積ならびに脳状態を観測・調整する技術の発達をもたらす様々な可能性と危険性とは対していかに対処するのか、を論究することである。具体的には、エンハンスメント（脳機能の薬理的強化）、マインドリーディング、マインドコントロール、といった事象が既に一部現実的な問題となりつつある。この点で、脳・神経倫理は医療倫理から生命倫理へと展開してきた応用倫理の一つの分野であるとみなすこともできるだろう。しかし同時に、脳・神経を問題にすることは、「倫理」そのものに新たな次元を開くことになる。なぜなら、人の倫理的直感・判断・行動は、他ならぬ脳の活動によって可能になっているからである。もちろんこれは、脳が倫理の原理であり基底であるということの意味はしないが、しかしまた、脳が倫理の「現実性の条件」であることも間違いない。したがって「脳・神経倫理学」は同時に「倫理の脳・神経学」でもある。この循環性あるいは自己言及性が、脳・神経倫理を従来の応用倫理から区別する重要な構造的差異なのである。この生成途上の領域が、単に社会的な合意や規範の形成に役立つに留まらず、その理論的あるいは形而上学的な可能性をも余すところなく展開することを期待したい。

（串田）